

—伊野川から忠別川までの地名⑯

近文山はチノミシリ

昭和三十五年、知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」で、掲載地図の近文山は、チノミシリとして、次のように書いた。

チノミシリ(cini-nomi-sir 我ら・祭る・山)――今、近文山(ちかぶみやま)

この知里真志保の地名解に協力した近文の古老・荒井源次郎翁は、明治三十一年生まれで、平成三年に九十歳で亡くなられた。荒井源次郎翁は、このチノミシリについて、次のように記述された。

近文山・嵐山一帯は、昔からアイヌはチノミシリ(礼拝所)といつて、上川アイヌの繁栄と健康の守護神など数々の伝説を秘める上川ウタリ(註)

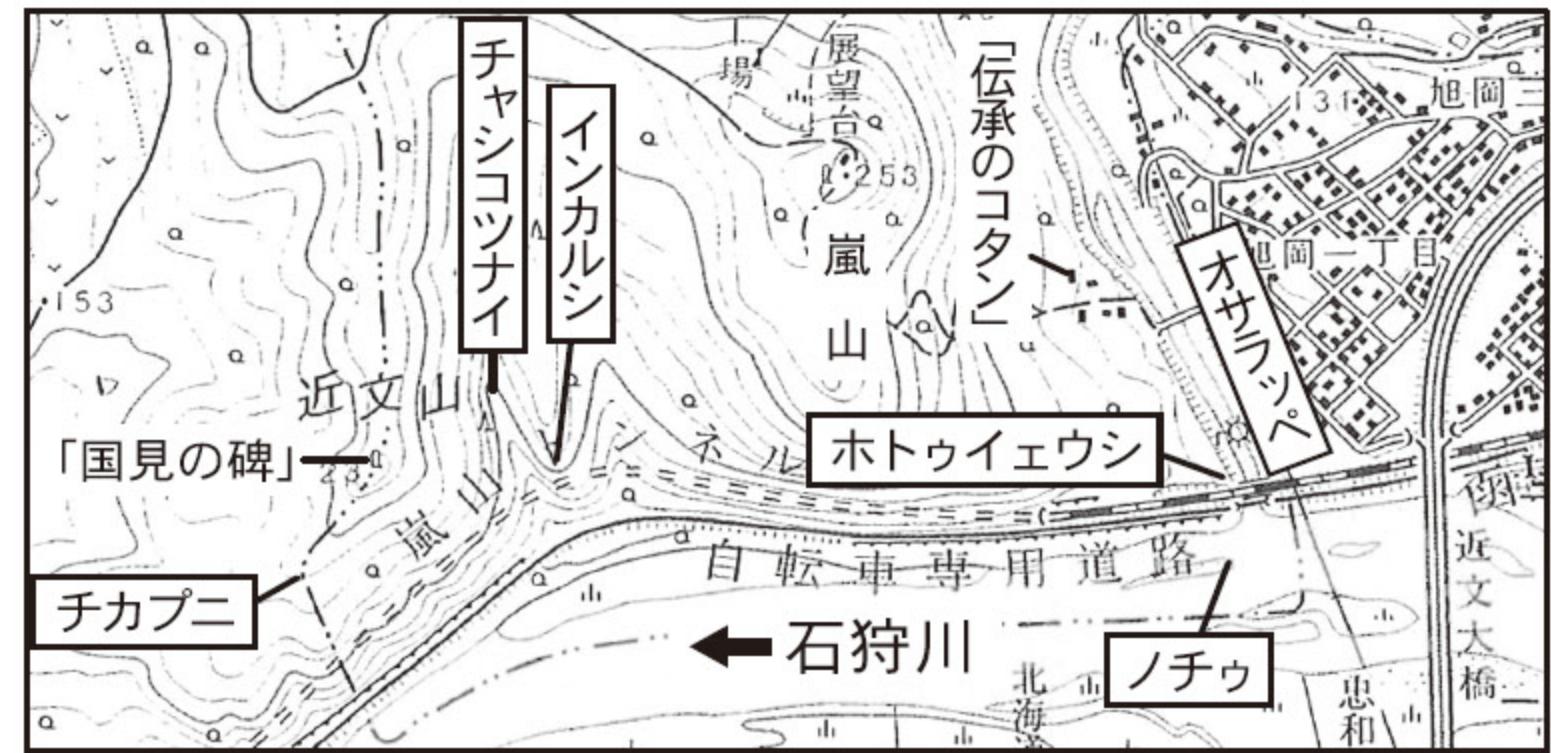
utari 同族)の聖地であつて、当時のアイヌは祭壇を設け、隨時礼拝をしていた。(『続アイヌの叫び』)

知里真志保は、チノミシリを近文山に限定しているが、荒井源次郎翁が書かれたように、近文山から、嵐山を含めた一帯が、チノミシリであつた。

川村兼一監修、太田満執筆の『旭川アイヌ語辞典』では、チノミシリについて、次のように解説している。

cinomisir チノミシリー場所名詞、ci(われら)nomi(拝む)sir

(山)チノミシリ。その土地の人た拝する山。※(旭川のアイヌにとって、嵐山。昔は女が近付くことは許されず、男だけがその麓にイナウを捧げ神祈りした。現在は女性の参加も認められ、毎年五月、チノミシリの儀式が執り行われる。)



れる。

写真は、掲載地図の「伝承のコタン」

で行われた今年の「チノミシリカムイノミ」(聖なる地での祈り)の新聞報道

記事である(『北海道新聞』五月三十日)。主催は旭川アイヌ協議会、旭川チカツブニアイヌ民族文化保存会(いざれも川村兼一會長)で、今年で四十三回

カツブニアイヌ民族文化保存会(いざれも川村兼一會長)で、今年で四十三回

目。民族衣装を着た会員ら約三十人が参列したと報道された。

「アイヌ文化の森・伝承のコタン」は旭川市博物館の分館で、アイヌの人たちの住居「チセ(cise家)」三棟を復元展示等がなされている。

そこへ行くオサラッペ川の橋が、「チノミシリルイカ(ruika 橋)橋」で、橋名板は、荒井源次郎翁(号・古潭)の揮毫である。

昭和四十七年に、当時の五十嵐広三旭川市長の働きによって、「アイヌ文化の森・伝承のコタン」が完成した時、荒井源次郎翁は、次のように喜ばれた。

昔から上川アイヌの最も神聖視したいまだ自然に囲まれた環境にも恵まれたこの地に、この施設を見たのは誠に意義深いものといわざる得ない。(『アイヌの叫び』)

さて、近文山から嵐山一帯は、チノミシリ(わかれら・祭る・山)と、何故、神聖化されているかというと、ここは狩猟等で得た動物の頭骨を祀り、動物の魂を

アイヌ民族の伝統儀式「チノミシリカムイノミ」(聖なる地での祈り)が26日、旭川市と鷹栖町の嵐山公園「嵐山アイヌ文化の森伝承のコタン」で行われた。文化庁の2018年度「日本遺産」に認定されたばかりの「上川アイヌ」文化を象徴する聖なる地で、参加者が神に祈りをささげた。(尾崎良)

主催は旭川アイヌ協議会、旭川チカツブニアイヌ民族文化保存会(いざれも川村兼一會長)で、今年43回目。民族衣装を着た会員ら30人が参列した。(尾崎良)

ボロチセ(大きな家)内いろいろ伝承するようにして」と話した。

りを囲みながら、お神酒をイナウ(木樽)にかけて、1年の無事に感謝し、人々の幸福を願った。鶴舞などが日本遺産で認定された川村會長は「日本遺産の伝承が伝わる大雪山系周辺の景観や儀式、舞踊などが日本遺産で体験した」。

日本遺産は地域の歴史や文化の発信を目指す。アイヌの舞など古式舞踊も披露され、来訪者が一緒に輪になって踊りを笑顔で体験した。

「上川アイヌ」聖地で祈り

旭川・鷹栖でチノミシリカムイノミ



古式舞踊も披露

1年の無事を感謝するなどして神に祈りをささげたアイヌ民族の伝統儀式「チノミシリカムイノミ」